

2023年3月3日に朝倉書店から出版

「サステイナブルな「都市と暮らし」を科学する」

第1章を執筆しています

第1章 環境について考える

1. はじめに (略)

日本が位置するアジア地域全体の状況は、都市の発展と消費拡大に伴うプラスチック使用増加と温暖化の影響と考えられる事象がみられる。その一つの例が2021年9月中旬頃から北海道道東沿岸の釧路、厚岸、浜中、根室付近で赤潮が原因とみられるウニやサケ、ツブ類等の多様な魚種に大量死が発覚した。この原因の真相は明らかではないが、国内史上最悪となる多額の損害が見積もられた災害だった。この災害は温暖化による海水温度上昇や管理不能となったプラスチック等の流入によって富栄養化が進み、海洋環境破壊が急速に進行している可能性は否定できない。

このように複雑な事象が絡み合っ引き起こされる環境問題の解決を世界が同時に実現させるためには「SDGs 目標」や「パリ協定」を含む国際協調に基づく温室効果ガスの削減、そして「カーボンニュートラル」を2050年よりも早い時期に前倒しで実現させる必要がある。

特に食糧やエネルギー・資源の高消費国である日本においては、現在の原油依存型の社会経済活動から脱却することは急務の課題である。人類にとって安全で公正な空間を永続的に維持・管理する為には、エネルギー、水、安全な気候、生物多様性と生態系の適切な保全が必要で、予防原則に基づく資源の有効利用を図る「サーキュラーエコノミー (循環経済)」の実現を急ぐ必要がある。

本稿では、カーボンニュートラルの実現が経済成長の鍵となる可能性はあるのか、という問いについて、新型コロナウイルス感染拡大に加え、ロシア・ウクライナ戦争による世界で経済悪化が深刻となる中、日本社会の現状を鑑み、スウェーデンの環境取組を事例として取り上げながら述べていく。

2. 学生たちは地球環境問題をどのように捉えているか
3. With コロナにおけるライフスタイルの変化を促すために
4. 資源循環・サーキュラーエコノミーの実現性について
5. 「カーボンニュートラル」の実現が成長戦略になりうるのか？
6. 有機性廃棄物を利用するスウェーデンの取り組み
7. 世界は「カーボンニュートラル」社会を実現できるのか

以上

文：横浜市立大学・教授 青 正澄